



氏名	由本 陽子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 18290 号
学位授与年月日	平成 16 年 2 月 18 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成—
論文審査委員	(主査) 教授 河上 誠作
	(副査) 教授 大庭 幸男 教授 金水 敏

### 論文内容の要旨

本論文の目的は、英語の動詞を基体とする接頭辞付加と日本語の動詞十動詞の複合について、特に基体の概念構造 (LCS) がいかに拡張・変更されているかに焦点をあて、形成される語の意味と統語素性について明らかにすることである。理論的には、影山 (1993) の「語形成は複数の部門・レベルで起こり、それが属する部門やレベルによって異なる形態・統語・音韻的性質を示す」とする「モジュール形態論」の仮説をもとに、形成された語の意味解釈の側面からも語形成のモジュール性が支持されることを主張し、モジュール形態論の妥当性を証明するものである。論文の構成は 5 章 (351 頁) から成り、分量は 400 字詰め原稿用紙に換算して、約 922 枚に相当する。

第 1 章では、本論文の目的を述べ、本論が依拠する理論であるモジュール形態論と Jackendoff (1990, 1997) が提唱する「表示的モジュール性」にもとづく文法モデルとを簡潔に紹介する。第 2 章では、英語の動詞への接頭辞付加について考察する。生産的な接頭辞 *un-*、*dis-*、*re-*、*mis-*、*pre-*、*co-*、*inter-*、*trans-*、*out-*、*over-* を取り上げ、一見、基体によって多様に思われる各接辞の意味機能が、LCS レベルで記述することで一般化されることを示す。意味の多様性は基体の LCS の違いによって導かれ、また、結合する動詞の制約も LCS レベルで捉えられるようになる。さらに、本論の分析が、下位範疇化素性の「受け継ぎ」についても先行研究より広範囲の事実について説明できることを示す。

第 3 章では、日本語の語彙的複合動詞について考察する。語彙部門で起こる日本語の動詞複合は、5 種類の LCS の合成パターンに沿った意味解釈によって支配されており、その各パターンには、合成後の LCS に対する適格性条件としての語彙意味論的な制約があることを明らかにする。この制約に加えて格素性の受け継ぎを支配する「非対格性優先の原則」を仮定することにより、結合可能な動詞の組み合わせについて、影山 (1993) が提案した「他動性調和の原則」にまさる説明を与えられることを示す。

第 4 章では、日本語の統語的複合動詞について考察する。構造については、従来仮定されていた非対格型とコントロール型に加え、V<sup>0</sup> 併合型を提案する。これは、影山 (1993) の V' 補文分析の問題点を解消する代案である。意味に関しては、V2 として生産力のある動詞（「過ぎる、合う、尽くす、直す、そこなう」）の意味機能を個々に考察し、統語的複合動詞の意味解釈メカニズムには、結合する動詞の語彙意味に支配された概念構造で捉えるべきものと、文中に共起する要素との統語的関係によって導かれるものとがあり、統語的複合動詞の、統語構造をもちながら最終的には単一の語をなす、という 2 面性が、意味にも反映されていることを明らかにしている。

第5章では、全体のまとめに代えて、本論で取り上げた様々な語形成の中で類似した意味を表わすものを比較対照し、それらの意味的差異は、日英語の言語差や接辞付加対複合の違いというよりも、語形成の起こる部門における解釈メカニズムの差異として捉えられることを明らかにし、意味的観点からもモジュール形態論が支持されることを示す。また、語彙部門での語形成に伴う LCS の拡張や合成が、文レベルでの概念構造形成とは区別されることを示し、Jackendoff の仮定する表示的モジュール性が、 $X^0$  以上のレベルと  $X^0$  以下のレベルとの間で線引きされるべきだと主張している。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、Jackendoff が提唱する表示的モジュール性に基づく三重層モデルの枠組みを用いて、英語の動詞の接辞付加による語形成、日本語の語彙的・統語的複合動詞について考察したすぐれた論文である。特に語彙概念構造 (LCS) を重視し、その有効性を最大限に引き出そうとしている点はユニークであり、「英語では接辞による動詞派生が、日本語では複合動詞構造が有力である」とするなど、日本語に対するオリジナルな観察も多数加え、創見に満ちた理論を構築している点は高く評価できる。また、理論的には影山氏の「モジュール形態論」を支持するが、重要な修正を数多く加えて、意味解釈の側面からもその妥当性を証明し、一層一般性のある理論に成長させた功績は大きい。

論の展開においては、内外の語彙論、形態論、語彙的意味論にとどまらず、分散形態論を含む最新の統語論や、認知言語学、国語学、日本語学等に及ぶ文献を参照していて、理論的立場の違いにこだわらない、バランスの取れた研究態度がよく現れている。

しかしながら、いくつかの課題も残されている。①文法性の判断に微妙なずれを感じる点があり、文法性の判断基準を明らかにする必要がある。また、②LCS の意味関数の設定の仕方や統語構造との対応規則について、やや恣意性が感じられるところがある。③LCS という構造を立てることの理論的妥当性や関連する理論的枠組みの明確な全体像を今後提示していく必要がある。さらに、④歴史的変化への積極的な取り組みも望まれるところである。

このような課題は残るが、これらは今後の発展的課題として捉えられるべき性質のものであり、本論文の本質的な価値を損なうものでは決してない。よって、本論文は博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。